

■はじめに

本学図書館にはロシア語の貴重書が多数所蔵されています。その蔵書構成を見てみると、(1) 19世紀中葉の文学作品が多く、(2) 散文形式の作品、特に長編小説が過半を占めていることがわかります。ロシア文学を知るうえで長編小説の存在は重要なポイントになりますから、この蔵書構成は、ロシア文学史の一端を凝縮して伝えています。

■ロシア散文小説の黄金時代

ロシア文学史には特徴的な時代がいくつかあります。中でも、19世紀初頭から1830年代末までを「金の時代」、シンボリズムをはじめ多様な文学潮流が現れた19世紀末から1920年代までを「銀の時代」として、特に区別しています。いずれも、基本的には詩人の活躍した時代でした。

一方、主要な文学ジャンルが散文へと移る19世紀中葉（1840年頃から1880年頃まで）もまた重要です。まさにこの時期、レフ・トルストイやドストエフスキー、ツルゲーネフ、ゴンチャロフらが活躍し、優れた長編小説を残したのです。

本学図書館は、この時期に出版された図書を多く所蔵しています。例として、過渡期に出版されたゴーゴリ『死せる魂』（1842, 1855）のほか、トルストイ『戦争と平和』（1868-1869）、ツルゲーネフ『父と子』（1862）があります。また、ドストエフスキーの著作は、『罪と罰』（1867）、『悪霊』（1873）、『未成年』（1876）、『カラマーゾフの兄弟』（1881）および『作家の日記——1877年』（1878）と複数点あり、これだけで一つのドストエフスキー・コレクションを為しています。

■西欧の枠からはみ出て

これらの長編は具体的に何を描いたのでしょうか。例えば『戦争と平和』は、「ナポレオン戦争とロシア」を主題に、戦争の場面や貴族の生活描写、歴史哲学や生死にまつわる議論など、多様な要素を含みこんでいます。トルストイらしい執拗な思考と描写も相まって、内容的にも物理的にも分厚い書物となっています（奇妙なことに、作家の姓「トルストイ」は「太った／

厚い」を意味する形容詞「トルストイ」に由来しています）。「小説」という一つの容器にあらゆるものが詰め込まれていることから、作家ヘンリー・ジェイムズは本作を「ぶよぶよ、ぶくぶくのモンスター」⁽ⁱ⁾と評価しました。

『戦争と平和』における雑多なものの混合という側面は、実のところ、多かれ少なかれ同時期のロシア文学に共通していると考えられます。この当時、ロシアで主要な言説ジャンルと言えば、何よりもまず文学でした。検閲の存在もあり、自由な思索とその表明の手段が限られていたのです。作家たちは、文学、とりわけ小説の形式を使いながら、そこに美的なものだけでなく、社会思想や哲学的議論、宗教的理念の探求や心理分析なども自在に取り込んでいきました。ロシア国内で司法、行政、教育等、多面にわたる大改革が進行していたこともあり、文学は知識人層が社会の行く末を真剣に模索する場となりました。当時の西欧的規範には収まらないロシア的「小説」が成立する背景には、このような事情があったようです⁽ⁱⁱ⁾。

■おわりに

以上、本学の貴重書を紹介しながら、19世紀ロシア長編小説の特徴について簡単に見てみました。これらの作品の原典は、内容、文字の形、装丁を介して、当時の社会情勢や出版環境等、様々な情報を暗黙の裡に伝えています。

もちろん、ここで挙げた文学作品は、その成立時から社会環境が変化した現代においても楽しめる要素を持っています。張り詰めた心理的駆け引きや個人の内面の深みを描く『罪と罰』、壮大な時間スケールで人物の生と死をたどる『戦争と平和』は、その好例と言えるでしょう。ぜひ一度手に取って、広大なロシア文学の世界を体験してみてください。

参考：

- (i) 乗松亨平「リアリズム文学」『ロシア文化辞典』丸善出版、2019年、338-339頁。
- (ii) 沼野充義「言葉の力と文学の権威」『ロシア文化辞典』364-365頁。貝澤哉「『厚い雑誌』の興亡：19世紀の雑誌読者」、大江健三郎ほか『21世紀ドストエフスキーがやってくる』集英社、2007年、267頁。

ふかたき ゆうた（臨時職員・京都大学大学院生）